

## 『臨濟録』の一考察

須山長治

凡そ、臨濟義玄の説法は「真正ノ見解」をめぐる展開であると思われる。次の引文は、「真正ノ見解」を含む、「示衆」中より抽出し得るすべての用例である。「示衆」の説法は、他の「上堂」「勘弁」と同じく直接的会話文であり、文そのものの中に、説く者と聴く者との息づかいが存するので、それを分解・抽出することは語気から来る内容の充実を損ねる結果となる。しかしここでは、敢えてそれを行い、「示衆」中の「真正ノ見解」の内容を構成する要素の分析と「真正ノ見解」をもとにした臨濟の説法の構造の論理を探ってみた。

A 今時学<sub>レ</sub>仏法<sub>一</sub>者、且要<sub>レ</sub>求<sub>三</sub>真正見解<sub>一</sub>。若得<sub>三</sub>真正見解<sub>一</sub>、生死不<sub>レ</sub>染、去住自由。不<sub>レ</sub>要<sub>レ</sub>求<sub>三</sub>殊勝<sub>一</sub>、殊勝自至。

B 道流、切要<sub>レ</sub>求<sub>三</sub>取真正見解<sub>一</sub>、向<sub>三</sub>天下<sub>一</sub>横行、免<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>這<sub>一</sub>般精魅惑乱。

C 夫出家者、須<sub>レ</sub>辨<sub>二</sub>得平常真正見解<sub>一</sub>、辨<sub>レ</sub>仏辨<sub>レ</sub>魔、辨<sub>レ</sub>真辨<sub>レ</sub>偽、辨<sub>レ</sub>凡辨<sub>レ</sub>聖。若如<sub>レ</sub>是辨得、名<sub>二</sub>真出家<sub>一</sub>。

D 若是真正学道人、不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>世間過<sub>一</sub>、切急要<sub>レ</sub>求<sub>三</sub>真正見解<sub>一</sub>。若達<sub>三</sub>真正見解<sub>一</sub>、方始了畢。

E 問、如何是真正見解。師云、你但一切入<sub>レ</sub>凡入<sub>レ</sub>聖、入<sub>レ</sub>染入<sub>レ</sub>淨、入<sub>レ</sub>諸仏国土、入<sub>レ</sub>弥勒樓閣、入<sub>レ</sub>毘盧遮那法界、処処皆現<sub>三</sub>国土<sub>一</sub>、成住壞空。仏出<sub>三</sub>于世<sub>一</sub>、転<sub>三</sub>大法輪<sub>一</sub>、却入<sub>三</sub>涅槃<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>見<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>去来相貌<sub>一</sub>。求<sub>三</sub>其生死<sub>一</sub>、了不可得。便入<sub>三</sub>無生法界<sub>一</sub>、処処游<sub>レ</sub>覆国土、入<sub>三</sub>華藏世界<sub>一</sub>、尽見<sub>三</sub>諸法空相<sub>一</sub>、皆無<sub>二</sub>実法<sub>一</sub>。唯有<sub>三</sub>聽法無依道人<sub>一</sub>、是諸仏之母。所以仏從<sub>三</sub>無依<sub>一</sub>生。若悟<sub>三</sub>無依<sub>一</sub>、仏亦無得、若如<sub>レ</sub>是見得者、是真正見解。

F 我且不<sub>レ</sub>取<sub>三</sub>你解<sub>一</sub>経論、我亦不<sub>レ</sub>取<sub>三</sub>你国王大臣<sub>一</sub>、我亦不<sub>レ</sub>取<sub>三</sub>你类似<sub>一</sub>懸河、我亦不<sub>レ</sub>取<sub>三</sub>你聰明智慧<sub>一</sub>、唯要<sub>三</sub>你真正見解<sub>一</sub>。

臨濟の説法は次のように三項に大略することができる。

一 他的一般仏教指導者と修行者に対する批判

二 自己の立場の表明

三 修行者への要請

當時の一般の仏教指導者は、従来からの經論に依存した佛法を宣揚するのが大方だったようで、「示衆」中には、經論家と禪家のいづれの言であるか判然と区別のつきにくいものもあるが、三身説・仏陀觀・修証の問題が指摘される。これらに対する臨濟の批判は手厳しく、臨濟独自の見解を以て主張する。例えば、三身説に対しては、三種の身は名言で依変にすぎぬといい、報化仏頭を坐断してしまふ。彼の仏陀觀は、仏陀を歴史上の人物と認めた上に展開したものである。

修証の問題に対しては、他の説を尽く生死の業・造業・造地獄の業などと極め付ける。六度万行や教中に向つて意度商量することもまた然りである。しかし、臨濟が最も嫌悪した一般の指導者の言動は、「神ヲ見、鬼ヲ見、東ヲ指シ西ヲ画シ、晴ヲ好ミ雨ヲ好ム」類であつたようで、それらを「野狐ノ精魅」として斥ける。先の引文Bの内容は、まさにそうした野狐ノ精魅に対する批判と修行者への要請を含むものである。

臨濟の面前に集まる、あるいは諸方を尋訪する一般の修行者はどうであつたか。彼らにも臨濟は痛烈に罵倒する。例えば、「瞎屢生」と呼び、「瞎禿子」「瞎漢」「瞎禿子無眼人」という。どれも「盲目」の意である。なぜ臨濟がそのように彼らに対して酷評を下すか、その理由は、彼らの修行過程に原

因があるという。「示衆」中、彼らが叱責をかう原因に『臨濟録』を読む者はしばしば出食わす。

臨濟と修行者の応対を語るものとして、中下・中上・上上・出格の各僧との「三種ノ根器」や「四賓主」は修行者の類型化にはかなならぬが、それ以外の臨濟の説法中の言句からも修行者の類型化は可能である。すなわち、(一)少根信のもの、(二)外に馳求し言句に固執するもの、(三)己の所得を過信するもの。

(一)の少根信は、「佯、這ノ一般ノ老師ノ口裏ノ語ヲ取ツテ、是レ真道ナリ、是レ善知識不思議ナリト為ヒ、我ハ是レ凡夫心、敢ヘテ他ノ老宿ヲ測セズ」「冷噤噤地ナルコト凍凌上ノ驢駒ノ如クニ相似テ、我レ敢ヘテ善知識ヲ毀ラズ、口業ヲ生ゼンコトヲ怕ル」と思い、「自ラ輕ンジ退屈シテ我ハ是レ凡夫、他ハ是レ聖人」と言つて「他ノ師子皮ヲ披ツテ野干鳴ヲ作ス」連中である。

(二)は、波波地に傍家に馳求する者で、表頭の名句上に向つて解を生ず。文字の勝相を活祖意だと思ひ込む。あるいは大策子上に死老漢の語を抄して、三重五重に複子にしまい、大事に保重してそれを玄旨だと確信する。以上の修行者である。「示衆」には彼らに対して三度も演若達多の故事「捨頭覓頭」が繰返される。

(三)の修行者は、「諸処ニ祇ダ胸ヲ指シ肋ヲ点ジテ、我レ禪

ヲ解シ道ヲ解ス」といつて臨濟の面前に現れるや、「便ち問難シテ、語リ得ザラシメント擬ス」が、臨濟に「全体作用セラレテ、学人空シク眼ヲ開キ得レドモ、口総ニ動カシ得」ざる者たちである。

さて、臨濟の面前に集まる修行者の中で、「物ニ依ラズシテ出デ来タル底」「一箇ノ独脱シテ出デ来タル底」の未だ出現しないことを臨濟は嘆くが、一般の僧の修行過程は次のように一様である。

○六度万行を専ら修す。

○満腹しきつて坐禅観行し、煩惱を抱締めて喧を厭い静を求む。

○理と行の相応をはかり、身口意の三業を慎む。

○舌を上あごに押当て湛然と不動で面壁坐禅する。

臨濟はこれら修行者に向つて「是レ外道ノ法ナリ」あるいは「大ニ錯レリ」といい、修行過程のあやまりを神会の北宗批判の言句に擬す。臨濟はこれら修行者に対しても、また彼らを導いた指導者に対しても、彼は眞の出家に相応しないものと極め付け、彼らを称して「一家ヲ出デテ一家ニ入ル」「造業ノ衆生」「眞ノ俗家ノ人」と呼ぶ。

## 二

さて、以上のように他の指導者と修行者を難詰する臨濟の

宗教とは如何なるものとみることができらうか。

彼の説法中、次の二つの文章に注目する必要がある。

○如<sub>レ</sub>禪宗見解、又且<sub>レ</sub>不然。直是<sub>レ</sub>現今、更無<sub>レ</sub>時節。山僧説処皆是。

○如<sub>レ</sub>禪宗見解、死活<sub>レ</sub>循然。参学之人、大須<sub>レ</sub>子細。

ここにいう「禪宗ノ見解」とは明らかに臨濟の立場を示すものであるが、如何なる内容を差すものか。次の文がその答となる。

○道流、山僧<sub>レ</sub>仏法、的<sub>レ</sub>相承、從<sub>レ</sub>麻谷和尚、丹霞和尚、道一和尚、盧山与<sub>レ</sub>石鞏和尚、一路行徧<sub>レ</sub>天下。無<sub>レ</sub>一人信得、尽皆起<sub>レ</sub>謗。

臨濟の宗教は祖師よりの相承したものであり、麻谷・丹霞・道一・盧山・石鞏と禪宗の見解を一にするものだと言張する。そして「人ノ信得スル無ク、尽ク皆ナ謗ヲ起コス」のは、先にみた一般の修行者や指導者の野狐の精魅としかいようのない仏法の修証が当時蔓延していたことを物語り、それに対して臨濟は眞向から自己の宗教を挙揚する。臨濟が自己の信するところを直接的に述べるそのあらわれとして、「山僧ガ見処」「山僧ガ説処」「山僧ガ仏法」「山僧ガ説法」という言句がしばしば用いられる。その幾つかの例を示すと、

①山僧説法、与<sub>レ</sub>天下人<sub>レ</sub>別。……(中略)……祇為<sub>レ</sub>我見<sub>レ</sub>処別、

外不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>凡聖、内不<sub>レ</sub>住<sub>二</sub>根本、見徹更不<sub>レ</sub>疑謬。

② 道流、山僧說法、說<sub>二</sub>什麼法、說<sub>二</sub>心地法。

③ 道流、約<sub>二</sub>山僧見処、与<sub>二</sub>釈迦不別、今日多般用処、欠<sub>二</sub>少什麼、六道神光、未<sub>二</sub>曾聞歇、若能如是見得、祇是一生無事人。

④ 道流、取<sub>二</sub>山僧見処、坐<sub>二</sub>斷報化仏頭、十地滿心、猶如<sub>二</sub>客作兒、等妙<sub>二</sub>二覺、担枷鎖漢、羅漢辟支、猶如<sub>二</sub>厨櫃、菩提涅槃、如<sub>二</sub>繫驢轂。

⑤ 約<sub>二</sub>山僧見処、無<sub>二</sub>無衆生、無<sub>二</sub>古無今、得者便得、不<sub>レ</sub>歷<sub>二</sub>時節、無<sub>二</sub>修無証無得無失、一切時中、更<sub>二</sub>無<sub>二</sub>別法、設有<sub>二</sub>一法過<sub>レ</sub>此者、我説如夢如化。山僧所<sub>レ</sub>説皆是。

①と⑤の内容を簡略化すると、

1 山僧が説法は世間の人とは別である。

2 この説法は心地の法を説く。

3 釈迦と我々とは別ではなく、現実の我々の心の働きには何等欠けているところがない。

4 我々の馳求心を煽りたてる菩提や涅槃などは煩いとなるものにすぎない。

5 無<sub>二</sub>無衆生無古無今、無<sub>二</sub>修無証無得無失である。

これらは先の他への批判の根拠たる臨済の立場であると同様に、一般の指導者との峻別でもある。特に注意したいのは③の引文で、この内容の上には「若シ能ク念念馳求ノ心ヲ歇得セバ、便チ祖仏ト別ナラズ。你、祖仏ヲ識ラント欲得ウ

『臨済録』の一考察(須 山)

ヤ。祇ダ你面前聴法底是レナリ。」という条がある。ここでは祖仏は你面前聴法底だと彼は断言する。これはとりもなおさず、釈迦は你であり面前の聴法底であるということの意味する。また、この聴法底は用処と同義であるから、臨済の面前で聴法する、そのものの働きに臨済が着目していることに気付く。これに類する語句は「示衆」中、実に四十回ほども使われている。「面前」に代る「目前」「即今」「如今」「現今」「今」という語もみな等しく具体的現実を表す。その具体的現実そのものが臨済の説法の場所であり、你面前聴法底の活動場所である。「示衆」中、他で語られる「人有ツテ解セバ、目前ヲ離レズ」とはそのことを語っているのである。具体的現実とは「面前」という空間と「即今」という時間だけでは成り立たない。空間を「面前」たらしめ、時間を「即今」たらしめる働きがあつてこそ具体性を帯びる。それ故、働きは空間と時間がなければ無効となる。この三者はいつとも一緒に考えられなければならない。臨済は「具体的」という代りに「歴歴」「昭昭靈靈」「孤明」あるいは「活撥撥地」ということばを使う。ともに空間を空間たらしめ、時間を時間たらしめる働きが活き活きすることの形容である。臨済は、この、以上述べた「具体的現実」以外のことは問題にしない。彼の目差すものはこの一点のみである。そして、これは何かと問いかける。「臨済録」はこの間で終始する。こ

の答は、問に対して答を成す間はすべて正解とはならないよ  
うだ。なぜならば、問に対する答は如何に言及しても名字を  
著することではかなく、すべて現実性を欠くからである。答  
を得ようとする馳求心に見切りをつけることによつてしか、  
具体的現実には確保できない。馳求心に見切りをつけて具体的  
現実を全うすること——を臨濟は「把得シテ便チ用キテ、名  
字ヲ著スルコト莫キ」という。この句は二度使われ、彼はと  
もにこれこそ「号シテ玄旨ト為ス」とする。

この「玄旨」を得るには如何にしたらよいか。これが次の  
問題となる。これに関連する文を次に引くと、

- a 你若欲<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>生死去住、脱著自由、即今識<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>聽<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>底<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>。
- b 道流、今時、且要<sub>テ</sub>識<sub>ニ</sub>取<sub>ニ</sub>四種無相境、免<sub>キ</sub>被<sub>ニ</sub>境<sub>ニ</sub>擺<sub>ニ</sub>撲<sub>ニ</sub>。
- c 道流、你若欲<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>、直須<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>大丈夫兒始<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>。
- d 不<sub>レ</sub>是<sub>ニ</sub>娘生下<sub>ニ</sub>便<sub>ニ</sub>會<sub>ニ</sub>、還是<sub>ニ</sub>体究<sub>ニ</sub>練<sub>ニ</sub>磨<sub>ニ</sub>、一朝<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>省<sub>ニ</sub>。
- e 道流、你欲<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>見<sub>ニ</sub>解<sub>ニ</sub>、但莫<sub>レ</sub>受<sub>ニ</sub>人<sub>ニ</sub>惑<sub>ニ</sub>。
- f 你言<sub>ニ</sub>下<sub>ニ</sub>便<sub>ニ</sub>自<sub>ニ</sub>回<sub>ニ</sub>光<sub>ニ</sub>返<sub>ニ</sub>照<sub>ニ</sub>、更不<sub>レ</sub>別<sub>ニ</sub>求<sub>ニ</sub>、知<sub>レ</sub>身心与<sub>ニ</sub>祖<sub>ニ</sub>仏<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>別<sub>ニ</sub>、当  
下<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>事<sub>ニ</sub>、方<sub>ニ</sub>名<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>。
- g 大徳、造<sub>ニ</sub>五<sub>ニ</sub>無<sub>ニ</sub>間<sub>ニ</sub>業<sub>ニ</sub>、方<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>解<sub>ニ</sub>脱<sub>ニ</sub>。
- h 道流、你欲<sub>ニ</sub>得<sub>ニ</sub>如<sub>ニ</sub>法<sub>ニ</sub>、但莫<sub>レ</sub>生<sub>ニ</sub>疑<sub>ニ</sub>。

a はまさしくAの内容である。「聽法する底の人を識取せよ」とはそのまゝ「真正ノ見解ヲ要ス」である。bの「四種無相ノ境」とは、裏を返せばEの内容となる。c e g hは真

正の見解の条件となる。dは真正の見解の存在性。fは得法の論理である。

a hを文意を簡略化し連結すると、得法の論理構造がみえて来る。それを次に記すと、

○法は生来的にわかるものではなく、体究練磨して認得されるものだ。

○その為には、疑いを起さず、人惑を受けない大丈夫の漢であつて、

○四種無相の境を理解し、即今聽法する人を認知し、五無間の業を造らねばならぬ。

○このように自ら回光返照し無事なるを得法という。

### 三

臨濟は「示衆」中、修行者に向けて懇切に彼らの過ちを指摘し、繰返し繰返し有るべき有様を要請して已まない。冒頭の「真正ノ見解」の引文中の「且ラク要ス」「切ニ要ス」「須ラク弁得セヨ」「切急ニ要求ス」「唯ダ要ス」等は、そうした臨濟の懇切さと焦心を吐露したものとと思われる。実際に「示衆」中にみられる修行者への要請のことばは計五十程にものぼる。ここでは同語の反復は避けて、同類のものを類別して列挙する。

○得法への引導

・ 真正の見解を求めよ ・ 用いるならすぐ用いよ ・ 諸  
仏の本源を識取せよ ・ 自ら返照して看よ ・ 即今聽法  
する底の人を識取せよ ・ 四種無相の境を識取せよ

・ 現今用うる底を行ぜよ ・ 自家を看よ

○ 馳求への諫め

・ 人惑を受けるな ・ 外に求めるな ・ 模様を作すな

・ 造作するな ・ 念を息めよ ・ 裏に向い外に向つて違

著せば便ち殺せ・物に依らずして出て来い ・ 衣を認め

るな ・ 万物に随うな ・ 山僧の説くところを取るな

・ 仏を究竟と為すな ・ 文字の中に向つて求めるな

・ 物来たらば則ち照らせ ・ 疑いを起すな ・ 錯ること

莫れ

○ 日常の過ごし方

・ 論説閑話して日を過すな ・ 時光を惜め ・ 因循とし

て日を過ごすな

○ 出家者の有様

・ 色身に固執するな ・ 衣食の為に思い煩うな ・ 心に

一物も置くな ・ 大丈夫の気概でおれ

※

さて以上、臨済の説法を三項に大略して述べてきたが、臨  
済は常に你という「面前聽法する底に着目し、その人を識取せ

『臨済録』の一考察（須山）

よ、と言いつける。Fでいうように、經論を解すことも、国

王大臣であることも、弁懸河であることも聰明智慧者であ

ることも、臨済は問題にせずまた説かず、ただ真正の見解の

みを要求する。先にふれたように、引文Aと引文aとは同じ

内容である。即今聽法する底の人を識取することが真正の見

解にほかならない。真正の見解とは「具体的現実」から出発

することであり、差別の世界に透入していくことである。そ

して、その様々な現実で具体性のないものを否定していくこ

とにほかならない。具体性のないものは「歴歴孤明」では

なく、限定された世界あるいは生死にしばられた状態をい

う。ここに臨済の説法の目的がある。彼の思想を全体的に把

捉するためには、この真正の見解を理解せねばならない。最

後に、冒頭に引用したAとFの文を総括的に再構成し直し

て、「真正ノ見解」の全体的な把握を試みたい。

◎ 修行者は真正の見解だけを求めなくてはならない。

◎ 真正の見解を得れば、生死不染、去住自由となる。

◎ 真正の見解が完璧となれば、大事了畢したと言える。

◎ 修行者は己の真正の見解を常に心得て、仏と魔を見極め

て峻別しなければならぬ。

◎ 修行者は真正の見解をもって世間を渡り、一般の仏教指

導者の説くところを見抜き、味まされぬようにせよ。

〔註略〕

（早稲田大学大学院）